



Making Connections

British Council Higher Education
Inward Mission Report

12-15 November, 2012

The Inward Mission November 2012

ブリティッシュ・カウンシル主催
第 4 回英国大学視察訪問報告書

12 - 15 November 2012, UK

目次

1. はじめに	Page 2
2. University of Liverpool	Page 4
3. University of Warwick	Page 12
4. University of Nottingham	Page 19
5. University of East Anglia	Page 26
6. 巻末資料(第 4 回英国大学視察訪問参加者リスト)	Page 30



はじめに

英国の公的な国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルでは、日本の大学で国際企画、国際交流を始め様々な部署でご活躍の教職員の方々を対象に、英国の高等教育システムおよび大学の国際化に関する諸施策への理解を深めて頂くことを狙いとして、2012年11月12日から15日までの日程で、「第4回英国大学視察訪問」を実施致しました。

プログラムには、13大学(国公立大学8、私立大学5)から、総勢13名にご参加頂きました。参加者はまず、リバプールに集合し、リバプール大学にて国際化戦略の実践を視察。続いてウォーリック大学では、国際化の取り組みについて理解を深めた後、グローバル・キャリア・スキルプログラム Global TIES のショートコースを受講。さらにノッティンガム大学では、国際部からの発表とともに、大学国際化を専門とする修士号コースの紹介を受けました。最後にイーストアングリア大学では、セインズベリー日本芸術研究所を含めて視察。全体を通して、英国における大学国際化の最新動向やグローバル人材育成の取り組みに対して新しい知識を得る機会となりました。

以下、本視察訪問の参加者全員にご執筆のご協力を頂き、視察訪問報告書を作成しました。参加者の皆様が視察訪問をとおして得られた情報や知識、ご感想を広く共有させて頂き、日本の大学のあらゆる部署において日々、留学生や協定校関連の業務に取り組まれている方々のご参考となりましたら幸いです。

ブリティッシュ・カウンシル

【第4回英国大学視察訪問開催概要】

実施日時：2012年11月12日(月)～11月15日(木)

日本側参加機関：(アルファベット順)

北海道大学、慶應義塾大学、高知工科大学、京都工芸繊維大学、九州大学、明治大学、名古屋大学、立命館アジア太平洋大学、立命館大学、東京外国語大学、東京理科大学、筑波大学、山梨大学 (計13大学)

主催：ブリティッシュ・カウンシル

英国大学視察訪問 訪問大学一覧

訪問日		訪問先
11月12日(月)	A	University of Liverpool 訪問
11月13日(火)	B	午前、University of Warwick 訪問
		午後、Global TIES 特別セッション受講
11月14日(水)	C	University of Nottingham 訪問
		午後、University of Nottingham にて MA in International Higher Education から特別セッション受講
11月15日(木)	D	The Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Culture (SISJAC), University of East Anglia 訪問。
		午後、University of East Anglia 訪問。
11月16日(金)	E	(オプション参加) 夕刻、ブリティッシュ・カウンシル本部にて、「Experience Japan Exhibition」(慶應義塾大学主催、ブリティッシュ・カウンシル共催の日本留学フェア)参加校代表者、本視察訪問参加者、及び英国大学代表者を迎えるのネットワーキング・レセプション

第4回英国大学視察訪問 国内移動マップ



本報告書は、参加者の方々にご執筆頂き、ブリティッシュ・カウンシルが全体のとりまとめを行った上で作成したものです。参加者の皆様のご協力に、深く感謝申し上げます。文中、金額はすべて£1=138円で換算しております。また報告書内、「所感」につきましては、執筆者である参加者の皆様のご意見であり、ブリティッシュ・カウンシルの公式見解ではございません。さらに4頁以降、参加者、報告担当者のご氏名は、所属機関名アルファベット順、敬称略で記載しております。予めご了承下さい。

1. リバプール大学の概略

リバプール大学は、イングランド北西部の都市リバプールに 1881 年に創立された、英国で最も古く、歴史ある都市大学の一つ。世界的に高い評価を受けている伝統ある大学で、現在まで 8 名のノーベル賞受賞者を輩出している。また、英国の大規模研究型大学で構成するラッセル・グループの創設時からのメンバーであり、画期的な研究で常に世界のトップ 1% 以内の評価を得ている。

リバプール大学の研究パートナーは、アフリカ、アジア、欧州、南米、北米等世界各地に広がる。学生数約 22,000 人のうち、留学生が 4,000 人以上を占め、今後も留学生の割合を増やすことを目標としている。

2006 年には、中国の西安交通大学と、「西安交通リバプール大学」(XJTLU : Xi-an Jiaotong Liverpool University) を設立。XJTLU の学生は 2 年間リバプール大学で学習する機会が与えられ、リバプール大学の学生は蘇州工業園区の協力により就業経験が得られる交換プログラムに参加できる。また、リバプール大学は、欧州における代表的なオンライン学位授与機関でもある。Laureate Online Education と協力し、175 개국 6,000 人以上の学生に経営学、医学、IT、法学の分野でオンライン学位を授与している。



2. 訪問スケジュール

歓迎の辞

Welcome to University of Liverpool, Professor Kelvin Everest, Pro Vice Chancellor for Student Experience

発表 1: 大学国際化ー留学生リクルートメントと送り出し

Internationalisation: Student Recruitment and Study Abroad, Ursula Callaghan, Deputy Director, Student Recruitment and Admissions

キャンパス・ツアー

発表 2: 留学生サポート

Supporting International Students, Ms Vanessa Hammond Bryan, International Development Manager

発表 3: 国際連携と協働

International Partnership and Collaboration

Ms. Christine Bateman, Head, International Development Office

Dr. Samar Hasnain, Max Perutz Professor of Molecular Biophysics, Institute of Integrative Biology

発表 4: 卒業生ネットワーク

Alumni and Development, Mr. Andrew Morrison, Alumni Relations Manager

3. 発表要旨

歓迎の辞

Welcome to University of Liverpool, Professor Kelvin Everest, Pro Vice Chancellor for Student Experience

各発表に先立ち、Kelvin Everest 副学長より、リバプール大学および英国人学生の留学や国際交流への意識に関する一般的な説明があった。

- 英国人学生は、第二外国語として英語を学習する非英語圏の学生と異なり、英語しか話さない者も多い。その影響もあってか、英国人学生の海外派遣(特に非英語圏)は大学の国際化における大きな課題の一つである。そこで対策の一つとして、リバプール大学の学生および一般市民に対して無料の中国語クラスを開放している。
- リバプールは、18~19世紀に海港都市として発展し、19世紀末にはロンドンに次ぐ第二の都市と呼ばれるようになった。リバプール大学は、1881年、ヴィクトリア期の代表的な大学の一つとして創立され、キャンパス内にあるVictoria Building (p.4に掲載した写真の建物)は、19世紀に発展した都市大学(「赤レンガ大学 red brick universities」とも称される)を象徴する建築物である。
- オンラインマスタープログラムは成功事例であり、受講学生は、リバプール大学にて行われる卒業式に参加する。
- リバプール大学には、3つの学群(保健・生命科学、人文社会科学、物理工学)があり、それらの下に35の学部・学科がある。物理学や化学の分野で産学連携が盛んである。
- 留学生の割合は、他のラッセル・グループの大学に比べて決して高いとは言えない。しかし、徐々にだが、学内における国際化の機運は高まってきている。英語が読めない人のためという実用的な理由ではなく、いかに学内の国際化がすすんでいるかをアピールするために、学内の看板や道案内などを英語と中国語(簡体字および繁体字)を併記する計画もある。
- 西安交通大学と共同で設立した西安交通リバプール大学(以下、XJTLU)は、英国スタイルの高等教育を中国にて展開する画期的な取り組みである。XJTLUのキャンパスは現地政府により建設され、無料賃借期間を含む賃貸借契約を結んでいる。のべ2,000人が交換留学生としてリバプール大学で学んできた。成績優秀者には、学費の大幅な免除が認められる。しかし、多様性の観点から、留学生の中で中国人学生の割合が多すぎることや、英国人学生と留学生をどのように溶け込ませるか等、課題も多い。中国人学生同士は一緒に行動する傾向にあり、留学生と積極的に交流を図ろうとする英国人学生も少なく、パーティー等のイベントを開催しても、あまりうまくいかないことがある。また、リバプール大学からXJTLUへの留学希望者はまだまだ少ない。今年度10名を派遣したが、これは過去最高人数であり、海外留学(特に非英語圏や非ユーロ圏)に積極的な学生はまだまだ少数派。
- XJTLUで学ぶ学生が、英国の大学で学んでいるという意識を持てるよう、XJTLUのキャンパスに、リバプール大学のレプリカや、リバプール大学の写真等が展示してある「Liverpool Room」を設置する等工夫をしている。



発表 1: 大学国際化－留学生リクルートメントと送り出し

Internationalisation: Student Recruitment and Study Abroad,
Ursula Callaghan, Deputy Director, Student Recruitment and Admissions

概要

リバプール大学は、3つの主要なランキング(Times Higher Education World University Rankings, QS World University Rankings, Academic Ranking of World Universities)いずれにおいても世界17,000の大学のうち、トップ1%をキープしている。3.64億ポンド(約480億円)の収入のうち、留学生の学費が29%を占める。4,900名のスタッフのうち、13%が外国籍。留学生の割合は約25%で、これは派遣学生数の2倍の割合にあたる。

大学戦略

大学としての戦略の5本の柱は、①卓越した研究成果、②学生経験、③知識交流、④機会の開放、⑤世界展開と国際化であり、国際化も重要戦略の一つに挙げられている。





目標

国際化に関しては「To position ourselves as a global university」(「自らをグローバル大学として位置づける」)を掲げており、2014年までの目標として、①25%の学生が留学生で占められること、②国外でリバプール大学の学位を取得する学生数が25,000人を超えること、③派遣学生数が現在の2倍になること、を挙げている。

国際化を取り巻く学外環境

世界的には学生の流動性は高まっているものの、過去1~2年で、英国においてはその伸びは鈍い。以下がその要因と考えられる。

①政府の方針：英国では、トニー・ブレア首相が1999年に発表したPMI (Prime Minister's Initiative 留学生支援政策)が2011年度で終了した。PMI第一期(2000年~2005年)は約26億円、第二期(2006年~2011年)は約54億円の費用を政府が拠出し、留学マーケティングの取り組みを推進してきた。PMI終了後は、PMIで築いた基盤をもとに、各大学の自助努力による国際化の推進が求められているところ。また、2011年より留学生の学生ビザ取得に関する英語の語学要件が厳しくなったため、各大学は、非英語圏の国からの留学生が、競争相手のカナダやオーストラリアに流れるのではと懸念している。

②経済の悪化：英国およびEUの学生に対し、2010/2011年度まで£3,300(約46千円)だった学費は、2011/2012年度以降、多くの大学で£6,000~£9,000(約83万~124万円)に値上げされた。これは、財政赤字削減を最優先課題とする英国政府の方針によるもの。

③Post-Study work(PSW)ビザ：英国で学位を取得した人を対象に、卒業後2年間英国内での就労を認めるビザが2012年4月で終了したこと。

また、英国における留学生の55%がPGT (Postgraduate Taught)の大学院生、38.7%が学部生、3.8%がPGR (Postgraduate Research)の大学院生で、出身国割合は、中国27%、インド14%、ナイジェリア6%、米国5%、マレーシア4%である。70%が私費留学生で、6%は政府もしくは企業派遣による。留学生専用の寮はないが、留学生は希望すれば必ず入居できる。

国際化を取り巻く学内環境

Student Recruitment & Admissions Officeにおいて、受入および派遣にかかる業務を行っており、マーケットリサーチに基づき各種サービス等を細分化し、目標設定をしている。また、戦略計画と行動計画を毎年定め、各学部と共有している。

留学生リクルートメントの流れ

留学生リクルートメントの5つの重要なチャネルとして、①ダイレクトマーケティング、②留学エージェント、③Liverpool International College(カプランとの提携で開講する、リバプール大学への進学を目指す留学生を対象とした進学準備コース)、④XJTLU(西安交通リバプール大学)、⑤スポンサー(留学生派遣に積極的な企業等に広報等で働きかけるもの)、が挙げられる。

マーケットプランニング

留学生リクルートメントは、①英国、及びEU諸国、②それ以外の大きく二つに分けて行う。

②については、高等教育統計局(HESA: Higher Education Statistics Agency)によるデータ、目標人数、出身国の多様性および専門分野、マーケットリサーチの結果等を勘案して、重点国を決定する。


Priority1の国は、40名以上の在籍学生および毎年新生が入学する国。Priority1の国には、3回の訪問、「学生広報大使(student ambassador)」の設置、優先的な奨学金制度の設置、学校訪問、特別入試等の重点措置を講じる。

Priority2の国は、毎年15~30名の留学生を受け入れていること、Priority3の国は、10名の新生が入学する国、Watching Briefはリバプール大学が新しいプログラムを開発した場合等にポテンシャルが考えられる国や、奨学金制度が設立された国等を含む、という優先順位を設けている。2013年度は以下のとおり。

Priority1: 香港、ノルウェー、米国、タイ、トルコ、カナダ、インド、ナイジェリア、マレーシア、中国、シンガポール

Priority2: ベトナム、インドネシア、パキスタン、ロシア、カザフスタン、メキシコ、サウジアラビア、台湾

Priority3: スリランカ、ケニア、GCC(ヨルダン、カタール、オマーン、バーレーン)



Watching Brief(日本はここに含まれる): フィリピン、韓国、日本、ブラジル、オーストラリア、ボツワナ、クウェート、ブルネイ、イラク、イラン、ネパール、コロンビア、バングラデシュ、トリニダード・トバゴ、南アフリカ共和国、モーリシャス、ウガンダ、ガーナ、リビア、エジプト、アラブ首長国連邦、アゼルバイジャン、ウクライナ

留学生の送り出し

派遣の重点国は、リバプール大学の学生がどの国で学びたいかが密接に関係している。多くの学生が希望する留学先は、イギリスが旧宗主国である英語圏(米国、香港、カナダ、オーストラリア等)か、エラスムス・プログラムにより奨学金が得られるユーロ圏が大半を占める。協定に基づく交換留学では、インバランス(受入過多)の問題が多々発生しているのが現状である。

諸外国政府が設置する派遣留学生のための奨学金制度(例: ブラジル政府によるブラジル人留学生派遣を補助する奨学金制度である“The Brazilian Science Without Borders program”)等は、学費収入をともなった留学生受入れ拡大の追い風になると認識している。

英国人学生は、1 セメスターもしくは 1 年の長期留学よりも短期留学を希望する傾向にあるため、サマープログラムの開発も進めている。また、交換留学における受入過多のインバランスの問題をサマースクールへの派遣で解消する試みを開始している。

キャンパス・ツアー

Campus Tour, Ms. Vanessa Hammond Bryan, International Development Manager

天候不良のため、室内にてキャンパスマップおよびビデオクリップによるリバプール大学の紹介があった。

リバプール大学のキャンパスは大きく以下の 3 つのブロックに分けられ、19 世紀の都市大学の別名「赤レンガ大学 (“Redbrick University”）」の象徴である Victoria Building のような歴史的な建物から、近代的なものまで多様な建築が存在する。

- ・North Campus…医科学、化学、薬学等の校舎・研究棟
- ・Central Campus…理系分野の校舎・研究棟および事務組織
- ・South Campus…人文科学分野の校舎・研究棟

ビデオクリップを通してキャンパス内外の学生寮、図書館、ビクトリアギャラリー&ミュージアムなどが紹介された。

■キャンパスマップ

<http://www.liv.ac.uk/files/docs/maps/liverpool-university-campus-map.pdf>

■ビデオクリップ <My Liverpool>

<http://www.liv.ac.uk/my-liverpool/>

発表 2: 留学生サポート

Supporting International Students, Ms Vanessa Hammond Bryan, International Development Manager

リバプール大学は学生の代表組織(student representative body)を有した英国で最初の大学である。学生の声が大学のガバナンスに活かされている例として Liverpool Guild of Students の活動について紹介された。また、留学生を支援する取り組みとして、International Support Team の活動についても説明された。

The International Support Team の活動について

Mr. Christopher Bennett, International Support Team Manager

- 活動メンバー: 4 名

■ ミッション

留学生に対し、大学のスタッフや外部団体と協力しながら専門的なサービスを提供し、学生生活の向上を目指す。具体的には、専門的な各種アドバイスの提供や学生フォーラム、説明会、ワークショップ等の多様なプログラムを提供する。

■ 活動内容・特色:

- ・入国手続き、家族、健康、安全、英国の文化、住居、仕事、税金等の留学生が抱える問題に対して専門的なアドバイスを提供する
- ・さまざまな新入生歓迎プログラムを開催する
- ・プレゼンテーションを実施する(ビザ、在学中または卒業後の就労に関する情報提供や、クリスマス等の休校期間をリバプールで過ごす学生に向けてのアクティビティーの開催)
- ・サービスの提供方法は多岐にわたる(メールや対面での1対1のアドバイス提供、ニュースレターのメール送付、ソーシャルメディアやウェブサイトの活用)
- ・留学生の学生生活をより良いものにするため、大学のスタッフやリバプール市議会などの外部の組織とも協力しながら活動を進めている

Guild of Students の活動について

Ms. Chi Chi Nwokoro, Vice President, Liverpool Guild of Students

■ 運営体制:

- ・活動メンバー: 学生の中から選挙で選出される役員 4 名、ボランティア、スタッフ
- ・役員 4 名 (President、Deputy President、Vice President 2 名) は休学し、フルタイムで職務を遂行する
- ・活動資金は大学から提供されるが、Guild 自身がイベント開催にかかる資金調達を行うこともある
- ・学生は自動的に Guild のメンバーとなる

■ ミッション:

学生の代表として、学生がより良い学生生活を送れるよう、キャンペーン活動を通して積極的に変化を起こす。また、新たな知識を得たり交流を広げるための様々な機会や活動を学生に提供し、学生同士がそれを共有することでさらに学生生活を向上させる(Listen-Lobby-Lead)。

■ 活動内容:

- ・学生フォーラムの開催
- ・キャンペーン活動 (例: 学内のオンラインサービスの向上を大学に求めるキャンペーン)
- ・Student Activity
 - ・多くの留学生がボランティア活動に参加している(例: 植樹活動、ホームレスの自立支援)
- ・student society (学生団体)が 100 団体以上組織されている。これらの活動を学生が共有することで、所属学部や文化を超えて交流することができる。African Society や Malaysia Society などの Cultural Society もあり、異文化を学ぶ良い機会ともなっている。
- ・International Support Team と共同で新入生の歓迎イベントを企画することもある



発表 3: 国際連携と協働

International Partnership and Collaboration

Ms. Christine Bateman, Head, International Development Office

Dr. Samar Hasnain, Max Perutz Professor of Molecular Biophysics, Institute of Integrative Biology




- 教育や研究における国際化、及び協働が大学全体を動かす大きな原動力となっている。よって従来大学における戦略は分野ごとのチームによって戦略を立てていたものが、現在では大学全体で戦略を立てるようになっており、大学の国際化もその中に組み入れられる形となっている。
- 現在は2009年から2014年までの5年間のプランが進行中であるが、これらの戦略は組織の枠を超えた大学の戦略立案チームが作成し、各組織に対して調整を行う形でまとめられている。
- リバプール大学における国際的な教育への取組としては、中国・西安交通大学との共同大学(XLTLU)運営が最大のものであるが、これは単なる海外キャンパスではなく大学を新設した、という点に特徴がある。他にもトルコBilgi大学など国外の大学との協力、あるいは民間機関との共同によるオンラインでの学位プログラムの提供など、様々な事業に取り組んでいる。なお、オンライン学位プログラムについては特に修士課程のプログラムの需要が高く、今後の拡大が見込まれる。
- リバプール大学には、理工学部、保健・生命科学部、人文社会学部の3学部があるが、それぞれが持つ学部および大学院プログラムにおける教育とともに、研究分野ごとの研究クラスター、そして課題(エネルギー、環境、リスク対応)対応の分野横断型センター組織を形成し、研究を行っている。この分野間、あるいは大学間での情報交換によってイノベーションが生み出されている。
- また、リバプール大学では、日本の理化学研究所との共同によるPh. Dプログラムをはじめ、多くの国の機関との協力により研究・教育活動を行っている。こういった大学間の国際的な協力は、個人レベル、組織レベルの協力のどちらでも重要である。ただし、協定や覚書といった形式は特に必要というわけではなく、協力の内容、及びその質が重要である。

発表 4: 卒業生ネットワーク

Alumni and Development, Mr. Andrew Morrison, Alumni Relations Manager

- 卒業生は、大学にとって最も大きな位置を占めるステーク・ホルダーであり、リバプール大学の卒業生事業部(Alumni Relations)ではできるだけ多くの卒業生が引き続き大学と交流できるようにすること、その交流の質を高めることを目的として活動している。成功の鍵となるのは卒業生データベース、コミュニケーション、イベントの企画・実施であり、これらが大学と卒業生との交流促進、毎年寄付依頼プログラムによる大学への財政的貢献、および通常の寄付金額の増加につながっている。
- リバプール大学には世界182カ国に17万人の卒業生がいるが、うち10万人と連絡をとっており、さらにその中の21,000人は英国の外に活動拠点を置く卒業生である。
- 卒業生事業部では15人のスタッフにより活動している。活動の概要は以下の通り。
 - Communications: 年ごとの冊子、月ごとのe-News letterの発行、ソーシャル・ネットワーク、ダイレクトメールや電子メールによる卒業生への連絡
 - Involvement: 就職活動のサポート、キャリア支援、慈善活動、卒業生対象のイベントの企画・実施
 - Annual Giving: ダイレクトメールや電子メール、電話による年に2回の寄付依頼キャンペーンの実施これらの活動により、寄付金額は2005-6年実績で1,300万ポンド(約17億9400万円)まで上昇した。
- リバプール大学では国際的な卒業生が大きく増加しており、これに対応するため卒業生ネットワークのモデルを2008年に構築した。現在は世界中で40の卒業生ネットワーク、25人以上の卒業生広報大使が活動しており、特に中国、米国、マレーシア、ギリシャではそれぞれ1,000人以上の卒業生が参加するネットワークとなっている。これらのネットワークの構築にはおよそ3年をかけ、活動の中心となるボランティアの選出からデータベースの構築、イベントの開催、卒業生のネットワーク構築までプロセスを設定し、大学の主導により実施している。国際的な卒業生を対象としたイベントには大学主導、ボランティア主導、広報大使の企画によるものがあり、いずれもその開催国・地域の卒業生ネットワークを中心に実施されている。
- 卒業生のネットワーク形成については、長期的および短期的戦略の両方を考えることが必要である。また、より有効な卒業生データベースの構築、シンプルなコミュニケーション、より大学にとっても卒業生にとっても有益なイベントの企画と実施、そしてこれらの活動の評価を行うことが重要となる。大学はそれぞれ特徴が異なるため、その卒業生への





対応も異なってくる。いかに卒業生から大学へのニーズを把握し、それに応えていけるかが卒業生事業の課題である。

- なお、卒業生からの寄付は大学にとって重要であるが、アジア地域等国によっては寄付が一般的ではないため、国際的な卒業生ネットワークについては寄付の金額そのものよりも留学生リクルートメント等における情報共有が重要となる。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取組み・方針等について

- 中国・西安交通大学との共同大学の設立：

リバプール大学と中国の西安交通大学は 2006 年に西交リバプール大学(XJTLU)を設立した。これは英国の大学教育課程(3年)で授業が行われるリバプール大学の海外キャンパスではなく、中国の教育課程(4年)に応じた新大学を設立したという点が特徴である。現在 XJTLU には 7,000 人の学生が在籍しており、基本的にすべての科目を英語で学習する。私立の大学となるためその学費は中国国内にある大学の平均と比較して 4~5 倍と高いものの学生の人気は高い。また、成績の優秀な学生は 2 年間の教育をリバプール大学のキャンパスで受けることができ、リバプール大学の学生も XJTLU にて 1 学期、あるいは 1 年間の教育を受けることができる。

- 留学生ポートフォリオ：

リバプール大学の留学生リクルートメント部門(International Recruitment Team)においては毎年入学してくる学生数をもとに、国ごとに Priority を 1~3 まで設定してポートフォリオを作成し、外国人学生のリクルートに活用している。ただしリバプール大学では受け入れにあたって国ごとのバランスを重視しており、現状で学生が多く入学している国だけに注目するのではなく、“Watching Brief”として今後増加が見込まれるポテンシャルを持つ国にも注目している(詳しくは発表 1 を参照)。戦略的に外国人学生を受け入れる上で重要な戦術の一つである。また、上記部局のスタッフは業務ごとではなく地域や国ごと、例えば東・東南アジア担当、中東担当、アフリカ担当のように、各担当を設定し、リクルート活動を行っているのも特徴である。

- 大学内の国際化を重要戦略の一つに掲げる上で、いかに国際化が進んでいるか(進めていきたいか)を学内的にも学外的にもアピールすることに積極的であると感じた。一般市民に対する無料の中国語クラスの開放や、英語が読めない人のためという実用的な理由ではなく、国際化の象徴として学内の看板や道案内などを複数言語にて併記にする計画もその表れだと感じた。
- Guild of Students は、日本の学生自治組織に比べて組織規模も大きく、学生が主体となって常に新しい取組みを精力的に企画している。留学生支援部門(International Support Team)も、留学生に対して専門性の高いサービスの提供を目標とし、対面でのサービスだけでなく、ソーシャルメディアやメールを活用しながら活動を行っている。また、両者の共通点として、大学内外の組織との連携を常に意識している点が挙げられる。このことは、学生の目線に立って、大学では手の届かない細やかな留学生サポートが実現できると同時に、全学一体となって国際化に取り組んでいるという強い対外的アピールにもなると感じた。

5. 報告者所感

- リバプール大学は英国の大規模研究重点型大学で構成されるラッセル・グループの一員ではあるが、そのグループ内の位置づけとしては、各種世界大学ランキングの結果から考察するに、グループ内で上位に位置してはしない。しかし、中国の西安交通大学との共同大学の設立、外国人学生リクルートのためのポートフォリオの作成、外国人学生に対する在学学生を活用した支援など、ユニークな取組を積極的に実施している。今回訪問した 4 大学の中では最も古くから存在する大学ではあるが、特にその伝統に囚われることなく積極的に国際化を進めようという姿勢が感じられた。ただし、外国人学生の受入実績に対して自国の学生の海外派遣についてはまだ発展途上であり、現在の日本の大学と比較してもそれほどが進んでいるとは思われなかった。逆に見れば今後国際的な大学として発展するためのポテンシャルは十分にあり、上記のような取組も含めて今後も注目すべき大学である。



- 年度毎に留学生リクルーティングの重点国に関するプライオリティー付けが詳細に行われていることに驚いた。学費値上げ等により、英国および EU の学生の進学率低下が懸念される中、留学生からの学費は貴重な収入源になっているため、各大学にとって留学生獲得がますます重要な課題となっていることが感じられた。
- 学生による学生生活の向上を目指す取り組みには、学生ならではの力強さ見受けられた。Guild of Students の活動は「国際化」に特化したものではないが、全ての学生を対象に様々な活動に巻き込むことで留学生が異文化での生活を楽しむための大きな役割を担っているようである。

(報告担当： 島本 絵理、富永 敬子、畑 和秀)

1. 大学の概略

ウォーリック大学は、1965年設立(Royal Charter 授与)の総合大学であり、4つの学部(Arts, Science, Social Science, Medicine)を有している。英国の研究重点型大規模大学連合「ラッセル・グループ」加盟校である。産学連携など数々の先進的な施策に積極的に取り組んで卓越した成果を上げており、英国の全大学リーグテーブルの上位10位内にランクされている。学生数は22,000人を超え、約30%が留学生数である(約6,500人)。教員・研究者は1,389人に上る。その研究と教育の卓越性、イノベーション、及びビジネスや産業界との連携分野で高く評価されており、イングランド高等教育財政カウンスル(HEFCE: Higher Education Funding Council for England)、スコットランド高等教育財政カウンスル(SFC: Scottish Funding Council)、ウェールズ高等教育財政カウンスル(HEFCW: Higher Education Funding Council for Wales)、及び北アイルランド雇用・教育省(DEL: Department for Employment and Learning, Northern Ireland)が合同で実施する2008年度研究業績評価(Research Assessment Exercise 2008)ランキングで7位を獲得するなど、上位の研究大学としての地位を確立している。



1967年設立のWarwick Business SchoolはHEFCEが最高評価を与えた3校のビジネススクールのひとつである。また、サイエンスパークと産業界と連携したテクノロジー研究と知識移転施設であるWarwick Manufacturing Group(WMG)を擁し、Centre for the Study of Globalisation and Regionalisation(CSGR)は、同分野における欧州最大の研究所である。

ウェスト・ミッドランズ州コヴェントリー市に、緑地と湖を含む700エーカーのキャンパスを構え、学習、教育、研究に最適な環境を提供している。キャンパスには、学生会館、ヘルスセンター、スーパーマーケット、銀行、コインランドリー、美容サロン、旅行代理店、映画館、ミュージックショップ、劇場、アートギャラリー、カフェ、レストラン、バーなど、学生と教職員が必要とするすべての設備を整えている。更に、陸上トラック、広大な運動場、プール、フィットネススイート、全天候型競技場、スカッシュコート、屋内テニスセンター(障害者も利用可能)などの優れたスポーツ施設も併設している。これらの施設は一般に開放されており、料金収入を含む2010-2011年の営業収入は9600万ポンド(£1=138円として約132億円)に上る。

2. 訪問スケジュール

歓迎の辞と概要説明

Welcome to the University, Professor Donald R. J. Singer

発表1: ウォーリック大学の国際業務紹介

Overview of the University of Warwick International Office, Helen Johnson (Head of Programmes and Student Exchanges)

発表2: 国際パートナーシップについて

Warwick's strategic links with Japan, Dr Billy Mitchell, Head of International Partnerships

Global Ties session

3. 発表要旨

歓迎の辞と概要説明

Welcome to the University, Professor Donald R. J. Singer

大学評議員の Donald R. J. Singer 教授(臨床薬学・療法学部教授)より、ごあいさつとウォーリック大学の概要説明があった。1965年に設立され、2015年には創立50周年を迎えることから、2015年に向けて「Strategy 2015」に取り組んでいる、との紹介があった。大学の概要に関する詳細は前記参照。

発表 1: ウォーリック大学の国際業務紹介

Overview of the University of Warwick International Office, Helen Johnson (Head of Programmes and Student Exchanges)

国際担当、海外留学(Study Abroad)チーム責任者のヘレン・ジョンソンさんより、ウォーリック大学における国際業務の概要紹介があった。

大学事務局と国際担当

大学事務局の構成は、教務、国際、研究支援、入学、就職、学生支援の6パートである。

国際担当の戦略的な課題は5点挙げられる。それらは、①全ての学生を international student (“留学生”)とみなすこと、②多様性を確保すること、③国際的なサマースクール開発の強化、④国際共同研究と国際共同教育プログラムの開発強化、⑤サハラ砂漠以南のアフリカ諸国における存在感の確立、であり、戦略の実現に向けた取り組みを進めているところである。

国際担当の事務局メンバーの構成は、海外学習担当8名、留学生リクルートメント担当11名、大学間交流3名、学生交換留学10名である。

海外オフィスは、中国、インド、シンガポール、香港に設置している。その他に留学エージェントオフィスを置いている国・地域は、トルコ、タイ、ナイジェリア、韓国、バーレーン、カザフスタン、イラン、UAE、メキシコ、マレーシア、シリア、日本、インドネシア、台湾、ケニアである。

国際分野の取り組みは7つの指標を設けて評価・測定している。以下はその7指標である。


- ①学部の関与度、及びアカデミック・スタッフからの評価
- ②学生の満足度。これは全国学生調査(NSS: National Students Survey、HEFCE、HEFCW、DELにより実施)と国際学生調査(International Students Barometer)によって把握している
- ③共同研究資金の状況
- ④学生交換状況
- ⑤学生の多様性・多国籍性
- ⑥学生の確保状況と学費収入の状況
- ⑦教職員の活動状況と満足度



海外学習プログラムの概要

2011年に作成された大学の戦略計画の3つ目の課題において、「大学の全ての事業分野に国際化を埋め込むことによって、ウォーリック大学を国際的な灯台とする」という目標が設定されている。

この目標達成のため、海外学習を希望する全ての学生に海外学習の機会を提供すること、国際サマープログラムを開発すること、に取り組んでいる。



そのためのチームが海外留学(Study Abroad)チームであり、メンバーはプログラム責任者、2名の上級職員、上級コーディネータ、5名のコーディネータ(内2名はパートタイム)で構成されている。

主な海外学習プログラムは以下の通りである。

① イタリア・ベニスに大学施設を設置

ベニスの中心部に施設を持っている。そこでの主な事業は、(a)文化・芸術に関する教育プログラムの実施(秋学期)、(b)特別講義・講演の実施、(c) エラスムス計画に伴う学生交換、(d) 講演・セミナー・学会等、国内外の諸会議の開催などであり、活用されている。

② モナシュ大学との共同事業の実施

オーストラリア、モナシュ大学との連携を強めている。同大学とは、共同副学長の配置、教員の共同採用、事業への共同投資に取り組んでいる。遠隔講義を実施しており、グリーン・サステナビリティ分野の教育プログラムを実施している。

③ 重点地域での取り組み

エラスムス計画を有するヨーロッパ圏はもちろん、中国、北米、アフリカ、日本での海外学習プログラムを開発している。

日本では、東京大学とのプログラム(AIKOM)を実施。ウォーリック大学は物理学の学生を派遣している。東京大学では必ずしも物理学を学ぶのではないが、派遣された学生による同プログラムの評価は高い。東京大学の学生も受け入れている。

北米では、Centre for Urban Science & Progress (CUSP) in New York というプロジェクトに取り組んでいる。協力機関は大学のみならず産業界からも得ており、ニューヨーク大学、カーネギーメロン大学、ニューヨーク市立大学、トロント大学、インド工科大学ボンベイ校、IBM、CISCO による共同事業となっている。

中国でのプログラムも重視している。中国留学プログラム(Study in China)、中国人民大学、北京師範大学との共同プログラムが稼働している。人民大学からは4名の学生を受け入れ、ウォーリック大学からは10名の学生を人民大学のサマースクールに派遣している。

④ 国際サマープログラムの開発

2012年7月から開始した。ジャンルを超えたクリエイティビティ、国際ビジネスプロジェクトのコンテンツ。13カ国、19名の学生が3週間参加した。

⑤ その他

アフリカでのプログラム実施に取り組んでいる。また、ウォーリック大学オリジナルの HEFP(Higher Education Foundation Programme)を実施。HEFPは留学生向けのプログラムで、入学前に準備教育を行うもの(留学準備コース)。約300人が学んでいる。コース修了者の50%が英国のトップ10の大学に進学している。

EU域内はエラスムス計画に基づく交換留学がメイン。4,000ユーロで派遣でき、リーズナブルである。EU域外への派遣は学生の負担が大きくなるのが問題である。海外学習拠点を築く場合、連携パートナーから学生への資金支援を受けられるかどうかポイントである。

海外学習拠点

海外での学習拠点は、ヨーロッパ内の交流機関239カ所、学生の学習拠点551カ所などである。学生の海外学習機会は毎年700件以上にのぼっている。


発表 2: 国際パートナーシップについて

Warwick's strategic links with Japan, Dr Billy Mitchell, Head of International Partnerships

国際担当副部長、国際交流チーム責任者である William Lee Mitchell さんから、ウォーリック大学における国際パートナーシップに関する方針が説明された。

交流基本方針

海外パートナーに関する方針は、大学の戦略計画「Strategy 2015」の第4項目において、国際研究協力と国際教育共同プログラムの開発を強化する、と述べられている。具体的には、モナシュ大学との戦略的連携、北米・アジア他でのコアと



なるパートナーの確立、その他、パートナーシップの開発、とレベル分けされている。パートナーシップ締結において特に重視しているのは、共同学位(修士、博士)の拡大である。

国際委員会体制

国際委員会は年6回開催している。ウォーリック大学では国際担当の副学長は特に任命していない。5~6人の副学長がいるが、副学長がそれぞれの担当分野で国際化を担っている。英国の他大学の役職体制とは異なる点である。

国際委員会、国際分野担当部門は、学部、研究部、教務系とよく連携している。

パートナーシップの現況

ウォーリック大学は研究大学でもあり、国際共同研究案件も多く取り扱っている。教育の共同事業を行うパートナーは、それほど多いというわけではない。最近は企業とのパートナーシップにも興味がある。

パートナーシップ交流のための資金

学部・学科が国際的な共同事業を進めるための大学独自の資金を持っている。国際交流基金、中国パートナーシップ基金、ブラジルパートナーシップ基金を各部署に提供・配付している。1プロジェクト5,000から10,000ポンド(約69万~138万円)の支援となる。

また外部資金獲得の相談にも関わっている。例えば、英国国内では、英国とインド間の高等教育連携プログラム UKIERI (UK India Education and Research Initiative)のファンドの獲得、日本との関係では日本学術振興会(JSPS)が有力な外部資金である。

パートナーシップ締結において留意していること

- ① 基本的な方針として、MOUは結ばない、ということである。休眠するような協定には意味がない。連携先の大学が強く希望する場合のみ、MOUを締結している。
- ② パートナーシップにあたっては相手を選ぶことが重要である。自身をオープンに、誠実に対応することが重要と考える。その際は先方の組織の特性や文化的背景を尊重することを心がけている。もちろん、だからといってウォーリック大学の文化を重視しないわけではない。ウォーリックの文化を尊重し、ふまえ、両者にとって意味あるパートナーシップとなるよう、努力する姿勢が重要だと考えている。

レクチャーの後、Japan Societyに所属する学生によるキャンパスツアーに参加した。

4. Global TIES session


ウォーリック大学は、異文化コミュニケーションや職業能力に関する教育において豊富な経験を有し、「国際キャリア研究」の専攻など、大学と企業向けのコミュニケーションプログラムおよびキャリアプログラム開発の実績を数多く持つ大学である。これまで開発に関わった主なプログラムには、同校が提供する「Global People」や、HEFCEの資金による「eChina-UK Programme」がある。

「Global People」は「eChina-UK Programme」の一部門で、同大学の応用言語学センターがサポートする、世界を舞台に活躍するための能力開発に関する最新の研究成果と具体的ガイダンスを提供するリソースバンクで、学生の異文化適応能力の開発を目的としている。「Global People」のウェブから5項目(Life Cycle Model, Competency Framework, Learning Process Model, The Global Student, Campus Integration)に関するリソースにアクセスできるようになっている。

「Global TIES」は、「Global People」のリソースを元に、応用言語学センターがブリティッシュ・カウンシルの依頼により開発した、「文化」「リーダーシップ」「チームワーク」をテーマとするグローバル・キャリアスキル・プログラムで、大学生や社会人(大学教職員を含む)を対象としている。講義はEラーニングと遠隔講義(テレカンファレンス)を組み合わせて実施される。今回の視察訪問では、正規プログラムを短くカスタマイズしたものを体験した。出発前にEラーニング教材により自習し、ウォーリック大学では、自習した内容について、応用言語学センターの2人の教員による対面授業形式のセッションが行われた。セッションは、文化の異なった人々との間で生じるトラブルの解決法について、フレームワークを用いながら体系的に考察し、さらに、国際的なチームをまとめる方法やリーダーシップについての議論を通して、国際的コミュニケーション力を高めるトレーニングとなっている。

Global People (<http://www.globalpeople.org.uk/>)

eChina-UK Programme (<http://www2.warwick.ac.uk/fac/soc/al/research/projects/echina-uk/>)



I. Eラーニング教材

「Global TIES」の教材は、Moodle という Eラーニングアプリケーションソフトを介して受講者に提供される。今回は体験版として正規プログラムを2モジュールに短縮したものを自習用教材に使用した。多文化環境で仕事をする場合に生じるトラブルや誤解等の例を題材に、与えられた定義を用いて原因・理由を分析し、解決策を考えるという作業を行う。自習用教材には、文化と習慣の違いをテーマとしたモジュール A(Fundamental Principles)とリーダーシップとチームワークをテーマとしたモジュール B(Professional Applications)が用意されていた。Eラーニング教材には、Discussion forum と Instant chat room もプログラムされており、受講生と講師及び受講者同士は、オンラインで意見交換ができるようになっている。

モジュール A において、受講者は文化とは何か、また職場での異文化理解の重要性について考えを深めることができる。具体的事例を分析・理解するために、次のような定義が与えられた。

定義の例:

◆文化の 3Ps (Products, Practice, Perspectives):

- **Products** とは具象的な文化様相のことであり、建物、衣服、家具、部屋のインテリア等の有形の様相、及び言葉、発音、文法などの無形の様相を含む。
- **Practice** は行為のパターンで、車の左側通行、人と会った時におじぎや握手をすることなどであるが、言葉の選択や話し方もこれに含む。これらの行為は属する社会グループの習慣や規範を反映したものである。コミュニケーションのパターンには、High-Context(言葉を用いて明確に表現する)と Low-Context(言葉の途切れ、沈黙、声のトーンなど非言語チャネルを用いて表現する)がある。
- **Perspectives** とは各個人の深層に根差す無意識にとる態度、価値観、信念などにあたる。

目に見える行為 (Practices) と目に見えない信念や価値観 (Perspectives) は密接に関連していて、信念や価値観は行為に影響を与え、行為は信念や価値観を反映する。

◆問題解決のための 3Rs (Report, Reflect, Re-evaluate):


3Rs は異文化間トラブルを解決するための3つのプロセスである。まず起こったこととそれに対して自分が感じたことを具体的に描写してみる(Report)。次に、何故自分がそう感じたのか、どんな Practices と Perspectives が自分の背景にあるのかを考えてみる(Report)。更に、相手の立場に立って、相手がどんな Practices と Perspectives に影響されているのか、それが自分自身の判断にどう影響を与えているかを考える(Re-evaluate)というプロセスが提案されている。

モジュール B では、リーダーシップとチームワークに対する自分の考え方を知るとともに、他の人々の考え方の背景にある文化について考察し、チームワーク力を高めるリーダーシップとは何かを考える。伝統的リーダーシップから、最近注目を集めている新しいリーダーシップスタイルまでをタイプ別に分類して学び、更に、実際のミーティング場面の映像を視聴し、そこに登場するリーダーの文化的背景やリーダーシップのタイプを分析するなどして、セッションでのディスカッションに備えるようになっている。

II. セッション

セッションは、応用言語学センターの2人の講師の指導の下、4つのグループ(各グループ3~4人)に分かれ、自習した Eラーニング教材の中からいくつかのテーマを抜粋して進められた。

- ① モジュール A にある韓国人マネージャーとオランダ人上司のエピソード(韓国人マネージャーがオランダ人上司の部屋に入ったところ、上司は電話中で、マネージャーの入室に気付いて片手を上げて合図したが、電話を切ることはしなかった。韓国人マネージャーは上司が電話を終えるまでその場に待たされ、そのことを不快に思った)について、韓国人マネージャーが気分を害した理由は何か、自分が韓国人マネージャーであればどう感じるか、更に2人の登場人物の行為の背景にはどのような「隠れた文化」があるかを考える。
- ② 講師が日本で英語学校教師をしていたときの日本人上司との仕事場でのエピソード(昼休みに外出し、食事をした後に整髪して、始業時間から5分遅れて事務所に戻ったところ、上司は不機嫌だった)について、3Rs(Report, Reflect, Re-evaluate)を用いて分析する。
- ③ ニュージーランド人マネージャーとその部下とのミーティングの様子を記録した2つの映像を比較して、そこに登場するマネージャーの変化とリーダーシップタイプについて考える。

- 
- ④ 国際的チームを効果的に機能させるには、それぞれの文化の強みを理解して活用することが重要であるが、取り入れるとよいと思う日本の習慣や考え方は何か。これについて、受講者からは、もてなしの心、気配り、時間厳守、準備万端の心がけ、日本流コミュニケーション(他人の発言をよく聞いて、途中で遮らない)、根回し、全体責任、情報共有、などが挙げられた。

5. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取組み・方針等について

ウォーリック大学は創立 50 周年を迎えようとしているが、創立後の短い歴史の中で Times Higher Education の全英ランキング 8 位、産業界からの「卒業生を雇用したい大学」全英 2 位のポジショニングを得るという到達を築いたことは注目に値する。

訪問した他の英国の大学同様、国際化には積極的に取り組んでおり、ウォーリック大学においても、留学生比率 30%、海外キャンパスないしは海外学習拠点の整備(イタリア、オーストラリア、ニューヨーク、中国、日本など)といった取り組みを行っている。ユニークな点は、国際交流において、協定先大学が強く希望する場合以外、MOU の締結を必ずしも必要としない、とのポリシーがあげられる。日本の大学が外部評価の指標や大学の国際化取組み状況の対外的アピールにおいて協定機関数を重視している場合と対比的である。

2007 年に発表した大学の達成目標「Vision 2015」の中で、「国際主義を大学の全活動に組み込むことにより(Embedding Internationalism into every areas of the University's mission)、ウォーリック大学の世界的プレゼンスを確立する」という目標を掲げている。これは、大学構成員全体の意識に国際主義を根付かせることも理解でき、この取組みについては、リバプール大学でも、その重要性和、実現に向け努力していることが語られた。英国の大学は構成員がこの意識を共有することが国際化推進に不可欠であると認識しているのだと思う。大学全体で国際化に取り組むというウォーリック大学の考え方は、国際化担当の副学長を置かず、7 人の副学長がそれぞれの部門で活動を推進していくという体制からも伺える。日本の大学においても同様の意識の高まりを期待したい。

国際化教育では、「Global People プログラム」(前項参照)などにより、学生の"intercultural awareness and effectiveness"の向上に力を注いでいる。学生の効果的かつ健全な国際化を総合的に推進することが、学生の国際流動性と雇用可能性の向上、これらに伴う大学に対する学生の満足度の向上に繋がるのであり、そして、そのような国際化を推進するためには、大学は、学生を海外に留学させるだけでなく、多文化環境での共生・協働スキルを向上させる教育とサービスを提供する必要があるということであろう。日本でも平成 24 年度より「グローバル人材育成推進事業」が開始された。日本に先んじて、ボーダレスで活躍する人材育成に力を注いでいるウォーリック大学の、学生の国際流動性のみに着目するのではなく、学内の国際化に重要性を見出す取組みは参考になるのではないだろうか。

また訪英調査団が宿泊したオンキャンパスの宿泊施設も目を見張るものであった。高い水準の客室、レストラン施設を有している。1992 年、総長 Sir SHRIDATH RAMPHAL によってオープンした Conference Centres of Excellence であるとの銘板が掲出され、宿泊施設スタッフは優れた会議運営スタッフとしてのアワードを受賞していた。日本の大学においてこのような整備は相当な決意を要する投資になるだろうが、国際会議等を適切に担える機関である、との気高さを感じさせるものであった。

6. 報告者所感

ウォーリック大学の Japan Society(日本人留学生や日本に関心を持つ non-Japanese 学生で組織)の学生たちがキャンパスを案内してくれた。日本人学生は日本からの交換留学ではなく、家族とともに英国に滞在している学生。高校から英国で学んでいるという 3 年生の学生は、日本での就職を希望し、現地において日本型の就職活動を行っていた。学業に専念できない日本の就活スタイルはここにも陰を落としている。産業界はその影響力を認識し、学習環境を維持できる求人・募集活動に転換して欲しいと強く実感した。

ウォーリック大学は、初代学長の Jack Butterworth 氏(在職 1961-1985)が、僅か 10 名ではあるが若く創意あふれる基幹教員を集めて大学を創設したそうである。サッチャー政権下で高等教育機関への補助金大幅カットが断行された際にも、Butterworth 氏の下で、いち早く自主財源獲得と財源の多様化に向けての改革を行ったという。Warwick Manufacturing Group もその一つである。ウォーリックの革新カルチャーは創設時より継承されてきたものであろう。現在

も革新的で活力ある大学であり続けるウォーリックを視て、学長のリーダーシップと、改革を起こすことのできる教職員の意識の高さを感じる。また、Global TIESでも取り上げられている「チームワーク」は、ウォーリックに限らず今回訪問した他の大学でも、その重要性が認識されていると感じた。国際化が大学全体で取り組まなければ成し得ない改革であるとするならば、部署横断的チームワーク体制は事業推進の鍵となるのであろう。

(視察訪問全体を通して)

英国の大学にとって、国際交流とは収入源としての「留学生確保」につきるという極論を聞いたことがあったが、今回の最大の収穫は英国の高等教育の「国際化」について理解を深めることができたことである。

日本ではグローバル化という言葉が大流行し、グローバル化＝英語という単純な考えが主流を占めているように見受けられる。(英国では多くの場合、Globalisationという言葉よりInternationalisationという言葉が使われていることは、私にとってひとつの「発見」であった)。英国は英語が母語であり、主な大学では既に学生の20～30%が留学生で占められていて、日本から見ればキャンパスは十分に「国際化」している。日本がグローバル化で直面している課題は英国にはないと思っていた。

ところが、今回の訪問で驚いたのは英国の多くの大学で「Internationalisation」が重要目標として掲げられており、その内容は「これからの時代、英語だけでは足りない。学生を世界各地に送り出し、異文化に晒すことが重要だ」というものであったことだ。流石曾ての「大英帝国」だと感じた。

第二点の気づきは、上記の潮流は日本にとって好機であり、英国から留学生を誘致するチャンスだと感じたことだ。11月17日に王立協会で開催された慶應義塾大学主催日本留学フェア「Experience Japan Exhibition 2012」には500人が事前登録をしており、セミナーはどのセッションも満席であった。「今、英国ではちょっとした日本ブームが起きている」という言葉が会場で聞かれた。英国の若者から見た場合、

異文化体験 —どこで？ 米国？ 東アジア？ インド亜大陸？ アフリカ・・・？
東アジアであれば、中国？ 韓国？ 日本・・・？という選択肢になるのではないだろうか。

中国や韓国などからの留学生が減少傾向にある今、英国を中心としたヨーロッパとの留学生交流を、本腰を入れて考えてみたいと思った。

(報告担当: 伴 美喜子、高原 芳枝、塩田 邦成)



1. 大学の概略

ノッティンガム大学 (University of Nottingham) は、イングランド中心部ノッティンガムの最初のカレッジとして 1881 年に設立し、1948 年にノッティンガム大学となった。人文学 (Arts)、工学 (Engineering)、医学・保健科学 (Medicine and Health Sciences)、理学 (Science)、社会科学 (Social Science) の学部・研究科において様々な学科が提供されている総合大学である。英国の大規模研究重点型大学 20 校で構成するラッセルグループに所属しており、世界的な研究成果を上げている。ノーベル医学生理学賞及びノーベル経済学賞の 2 人のノーベル賞受賞者を輩出し、2012 年の QS World University Rankings では、世界で 72 位に位置している。



2012 年現在で、ノッティンガムキャンパスに約 34,000 人の学生 (Part-time 含む) が在籍しており、留学生は約 10,000 人在籍している。国際的な教育の提供を目標としており、英国の大学では初めて、1999 年にマレーシア、2006 年に中国で、海外キャンパスを開設した。マレーシアキャンパスでは、約 3,800 人 (内約 1,300 人が、マレーシア国籍以外)、中国キャンパスでは、約 4,800 人 (内約 200 名が中国籍以外) の学生が学んでいる。

2. 訪問スケジュール

発表 1: グローバル社会に必要なグローバルスキル ~英国大学の取り組み

Global skills for a globalised world: how UK universities are meeting the challenge, Dr. Vincenzo Raimo, Director, International Office

発表 2: グローバル時代における国境を越えた高等教育 – Transnational Education

TNE (Transnational Education) in the Global Context, Ms. Helen Foster, Head of Partnership Development, International Office

発表 3: 真のグローバル人材育成に向けて

Becoming Truly International -the Study Abroad Experience?, Ms. Gail Armisted, Head of Study Abroad, International Office

発表 4: 国際高等教育修士号コース

MA in International Higher Education
Professor John Holford, School of Education
Dr. Lucy Cooker, School of Education
Dr. Zhen Li, School of Education

3. 発表要旨

発表 1: グローバル社会に必要なグローバルスキル ~英国大学の取り組み

Global skills for a globalised world: how UK universities are meeting the challenge, Dr. Vincenzo Raimo, Director, International Office

国際化の進展にともない、グローバルな社会で活躍できる人材を育成することが社会から求められている。それに応えるために、高等教育のグローバル化を推進する取組を行うことが、日本のみならず、英国でも重要になっている。この発表では、日本の「グローバル人材育成事業」を踏まえたうえで、世界における人材流動性、教育の国際競争の高まり及びノッティンガム大学での取組等について紹介があった。

- 学生の国際的流動性が高まってきているなか、英国国内には、4000人の日本人学生が在籍している。同時に、日本に居ながら通信教育等で英国の大学教育を受講している学生が1000人以上おり、国境を越えた教育の在り方が多様化している。英国の学生のアメリカ、英国等の英語を母国とする国以外の国への留学も増加している。中国教育部の発表では、約270,000人の留学生が中国の大学で学んでおり、主要な出身国は、韓国、日本、ベトナム、タイ等であるが、英国の学生が中国の大学に入学するケースも増えている。
- グローバル人材を育成するためには、留学生として海外に送り出すばかりでなく、本国に在籍する学生の国際感覚の養成も重要である。英国産学連携会議(CIHE: the Council for Industry and Higher Education)の報告書「Global Graduates into Global Leaders」によれば、言語能力以外に、下記の能力が産業界で求められている。
 - 異なる出身国、背景を持つ人々と協力して仕事を行うことができる能力
 - コミュニケーション能力
 - やる気があり、精神力が強い
 - 多様な視点を持ち、新しい考え方ができる力、など
- ノッティンガム大学には、142カ国から約30,000人の学生が在籍しており、その内約1万人が留学生である。また、中国及びマレーシアキャンパスには40カ国から10,000人の学生が在籍している。留学生の出身国は、中国、マレーシア、ドイツ、タイ、シンガポール、インド、香港、フランス、ナイジェリア、アメリカ等となっている。
- 学生の海外派遣について、現在、在籍している学部学生の約20%をフランス、ドイツ、オーストラリア、カナダ、アメリカ等に派遣している。今後、派遣する学生の比率を25%まで高める方針である。
- ノッティンガム大学は、マレーシア、中国(上海)、メキシコ、ガーナなどに海外オフィスを設立している。
- ノッティンガム大学中国及びマレーシアキャンパスは、英語で授業を行っており、成績及び学位は英国のノッティンガム大学が管理。教育の質は英国高等教育質保証機構(QAA: Quality Assurance Agency)及び現地の高等教育の質保証機関によって保証されている。
- 社会で働く上で必要な能力を養成するThe Nottingham Advantage Awardを開設し、130コースを提供している。海外留学、言語教育、異文化理解等についてのコースも提供し、グローバル人材育成を図っている。コースの修了者には、証明書を発行し、履歴書に記載できるようにすると同時に、就職活動の援助も行っている。このコース修了者の就職及び進学率は85%で、ノッティンガム大学の卒業生平均72%に比べても高く、産業界からの評価も高い。

日本における大学国際化について、従来は外国語の能力が低く、国際化が進んでいる大学が少なかったと理解している。また、特に理系の学生の海外留学率が低く、産業界の留学に関する理解がないために学生の流動性を阻害してきたとも言われる。一方で近年、グローバル30に代表されるように、英語による教育や海外留学派遣への取組が強化されつつある。また、知っている限りでは、早稲田大学、国際教養大学、立命館アジア太平洋大学等、国際化の推進に成功している大学がある。就職に関して、就職時期を弾力化するなど、産業界の取組も始まっており、日本の高等教育の国際化が進むことが期待される。


発表 2: グローバル時代における国境を越えた高等教育 – Transnational Education

TNE (Transnational Education) in the Global Context, Ms. Helen Foster, Head of Partnership Development, International Office

インターネットサービスの世界的普及や交通手段の発達等により、高等教育の国際的需要が高まると共に、ブランチ・キャンパスの利用、海外の高等教育機関等との連携、遠隔教育(Eラーニング等)などその提供の形態も多様化している。本発表では、英国の大学として初めてマレーシアと中国にキャンパスを設立し、多くの留学生と、海外からの教職員を雇用して、英国の大学の中でも国際化をリードする大学と言われるノッティンガム大学の国境を越えた高等教育(Transnational Education、以下 TNE)に関する取組について発表があった。

- ノッティンガム大学では、TNEとは、ブランチ・キャンパス、フランチャイズ、ツィニングプログラム、共同プログラムや遠隔教育等、他国へ





提供する国際的高等教育と位置づけている。近年、国際的高等教育の必要性が高まっており、その背景としては、インターネットの普及、様々な分野でのグローバル化、国際的業務を行う人材の需要の高まり、大学業務の分野の多角化が挙げられる。

- さらに、シンガポール、マレーシア、インド、インドネシア、中東などでは、高等教育機関への進学者が急速に増えており、国内の進学希望者が国内の大学だけでは消化しきれない。今後もこれまで高等教育が発展していなかった地域での高等教育の需要が多くなることが考えられ、TNEの必要性が高まることが考えられる。また、英国全体で、海外キャンパスや遠隔教育などを利用したTNEの受講学生数は、2007年の約20万人から2010年には50万人に増加した。その約半分は海外協定機関等とのプログラムによりTNEを実施しているオックスフォード・ブルックス大学の学生である。
- TNEには、大学の経済的な利益だけでなく、学生の国際的な経験に重点を置くこと、研究の足掛かりとなり得ること、社会的需要に基づくカリキュラム開発であること、カリキュラムの国際化となること等が必要である。
- TNEには、以下のようなタイプがある。
 - 1) 単位互換
 - 2) 大学間の編入、進学
 - 3) ジョイントコース: 両大学で履修し、双方の単位により、どちらかの大学から学位を得る
 - 4) 学外履修: 短期コース、「フラインファカルティ」(ノッティンガムの教員が短期で海外キャンパスに滞在し授業を行う)等。定時制や社会人学生が履修しやすい。
 - 5) 海外キャンパス
 - 6) ジョイントPhD
 - 7) その他のコラボレーション
- TNEを提供する地域＝市場を選定する際には、どのような活動をしたいか、どのような市場を開拓したいかのバランス、スケジュール(時間、期限)の設定、現地の高等教育の質と規模、政府の方針等を考慮して判断する必要がある。また、パートナーを精査する際には、先方に協定締結の根拠があるか、質的人的リソースがあるか、コミットメントを果たすリソースが有るかなどの側面を検証する必要があり、特に将来像を共有できるかが重要となってくる。
- TNEの手法により、リスクの種類も違ってくる。例えばブランチ・キャンパスは教育の質を確保するにはリスクは少ないが、経済的リスクは大きい。このようなリスクを考慮し、自機関内での検証も十分に行う必要があるが、TNEは高等教育機関の新たな挑戦となり得るもので、教育の質を高く保持し、ブランドと評価を保つ手法となり得る。

発表 3: 真のグローバル人材育成に向けて

Becoming Truly International -the Study Abroad Experience?, Ms. Gail Armisted, Head of Study Abroad, International Office

前述のとおり、ノッティンガム大学では、2015年までに学部学生の海外派遣を現在の約20%から25%までに高めることを目標として掲げている。本発表では、現在のノッティンガム大学のStudy Abroadプログラムの現状と、学生の海外派遣率を高めるための取り組み、そして、海外派遣を経験した学生を真のグローバル人材に高めるための大学の取り組みについて説明があった。

ノッティンガム大学の海外派遣プログラム

英国における一般的な海外派遣プログラムは、1年間の海外留学を含む4年間の学位プログラム、エラスムスプログラムによる留学、学生交換協定に基づく協定校への留学である。

これらに加え、ノッティンガム大学には以下のような独自の海外派遣プログラムがある。

- 3カ国にあるキャンパスを利用したキャンパス間交流プログラム
ノッティンガム大学の有する国内キャンパス、中国キャンパス、マレーシアキャンパスのうち、所属キャンパス以外のキャンパスにおいて学ぶプログラム。



- Universitas 21 (U21)プログラム
学術交流を目的に設立された世界 14 カ国・21 大学の大学間ネットワークである Universitas 21 (日本からは早稲田大学が加盟)間での学生交換プログラム。
- MSCi International Relations プログラム
4 年間の学部プログラムであるが、卒業時には学士号に加え MSCi の修士号、Universitas 21 が運営する Certificate in Global Issues も授与されるプログラム。2 年次を除く 1、3、4 年次はノッティンガム大学で学び、2 年次の 1 年間は海外の協定大学に留学する。さらに、2 年および 3 年次には、Certificate in Global Issues のプログラムを同時に受講(E ラーニング含む)。4 年次には、国際関係学の修士課程の授業を受講するとともに、15,000 語の論文執筆が課される。
- 遠隔講義・E ラーニングを活用したプログラム
遠隔講義・E ラーニングの活用自体は海外派遣のプログラムではないが、海外派遣プログラムに参加しない学生に対しても、この仕組みを利用して海外での学びに変わる教育効果を与えられる媒体として期待され、今後の活用方法が模索されている。

海外派遣プログラム参加率向上のための取り組み—奨学制度の強化

2011 年 10 月に立ち上げられた全学的な外部資金(寄付)獲得プロジェクト「Impact Campaign」の一つとして、経済的な事情により海外派遣プログラムへの参加が難しい学生を支援しようと、海外派遣の際の奨学制度の強化に取り組んでいる。目標額 100 万ポンド(1 ポンド=138 円で換算した場合、1 億 3800 万円)に対し、現時点で 92 万ポンド(1 億 2696 万円)の寄付が集まっている。また、この中には、ノッティンガム大学の学生に対するものだけではなく、アフリカの協定大学からの交換留学生に対する奨学金(*注 1)なども含まれていることは特徴的である。

*注 1) ノッティンガム大学からアフリカの協定大学への交換留学希望者は継続的に存在しているが、経済的理由によりアフリカの協定大学から学生が派遣されず、学生交換が成立しないケースが発生している。このような事態を未然に防止するために、奨学金制度が設立された。

海外派遣経験を活かしグローバル人材を輩出するための取り組み—Inter-Cultural Awareness を高める

海外派遣プログラムに参加しても、その経験を内省・分析し、自分の強みとして活かすことができていない学生が存在するという認識の下、学生が自らの経験を活かしグローバル人材として成長していくための支援プログラム「Outgoing Study Abroad: Developing Cultural Awareness」を以下のとおり実施している。

- 学生の就業力を高めるための正課外の支援プログラム Nottingham Advantage Award(“Cultural Awareness, language learning and Study Abroad”部門)のプログラムの一つ。国際部スタッフにより運営され、募集定員は 25 名。
- プログラムは、派遣前のセッション、派遣前～派遣中の E ラーニング、派遣終了後の帰国後セッションからなり、この間、日誌の提出やスカイプを利用したチュートリアルも実施される。
- プログラムの最後には、Degi-essay(海外派遣の経験を映像にまとめたもの)の発表と質疑応答が実施される。

発表 4: 国際高等教育修士号コース

MA in International Higher Education

I. Introduction

Professor John Holford, School of Education

MA in International Higher Education は、政策立案者から大学教職員まで、あらゆるレベルで高等教育の国際化に関わる人々を対象に提供される、「大学国際化」をテーマとする修士号コース。このコースは、大学国際化戦略の企画のあり方や、国際コースの管理運営、留学生の対応などについて、受講者の専門性を高めることを目的に開講されている。



コース概要

- 2年間のパートタイムコースもしくは1年間のフルタイムコース(7月~6月)
- 4つのモジュール(各30単位)を提供
 - Higher education and society: from Local to Global
高等教育の目的、公益性や、国際化への要請にどのように対応していくか等を、高等教育の社会的側面、経済的側面、キャンパスにおける文化的多様性への対応等をテーマに検討する。
 - International & Transnational Higher Education
高等教育が学生に与える本質的な利益は何か、学生の教育環境をどのように向上していくかについて、多様な文化的背景を持つ学生への対応や評価等をテーマに検討する。
 - Improving Learning in International Higher Education
高等教育の国際化、または国境を越えた教育について、その目的、戦略、課題などを検討する。
 - Conducting Research into International Higher Education
チーム体制で研究を実施。修士論文の準備を行う。
- 修士論文(60単位)
- 「ブレンディッド学習」(下記参照)を採用しており、2つのモジュールは完全にオンラインで学習が可能であるが、その他2つのモジュールは、オンラインでの学習に併せてノッティンガム大学でのサマースクールを受講する必要がある。

II. Blended Learning

Dr. Lucy Cooker, School of Education

Blended Learning とは、オンライン学習と対面学習を組み合わせたものであり、ノッティンガム大学の教育学部では、MA in International Higher Education と Postgraduate Certificate in Education (International) (以下、PGCEi) (*注2)の2つのコースが提供されている。これらのコースはともにオンライン学習を主とし、そこに対面学習組み合わせる形で実施されている。

- オンライン学習
Moodle という E ラーニングシステムを活用して運用されている。オンラインでの教材配布や動画の配信、さらにフォーラム機能を使って受講者同士の意見交換などが可能である。
約20名の学生に1名のチューターがつき、Eメールやスカイプを活用して支援を行っている。
- 対面学習
MA in International Higher Education: サマースクールの形式で2回実施
PGCEi: 受講開始時に4日間実施
- オンライン学習の問題点
 - 学生同士、学生と教員、チューターとのコミュニケーションの維持
 - 学生の学習に対するモチベーションの維持
 - 学生それぞれにIT環境が異なる(Moodleで配信される動画の再生が難しい等)など、安定的なオンライン学習環境の提供
- 上記問題の解決策
 - 対面学習や投稿欄、学生間の協働学習などを積極的に活用
 - 学生からの質問に対する迅速な対応
 - ITサポートの充実

*注2) 海外の教育従事者を対象とした、大学院レベルの学位提供を伴わない遠隔教育プログラム。修了者にはPGCEiが授与される。スペイン、中国、タイ、ナイジェリア、マレーシアなど世界中で約900名が学んでいる。



III. Images of British Higher Education

Professor John Holford, School of Education

英国の高等教育機関のイメージ戦略について、大学の校舎、学生を撮影した写真や絵、ウェブページ等により説明があった。

- ジョン・ヘンリ・ニューマンは「大学論」(1883年)の中で、大学とは普遍的な知識を育成する場所であり、自然科学や哲学を研究するだけでなく、その目的が教育にあるとしている。
- 英国の大学では講義や研究による知識の習得だけでなく、大学内での友人関係や生活体験を通じた人格形成も重要である。また、特に英国では全寮制による宿舎での生活体験や、教員や先輩との上下関係の体験も大学の重要な要素となっている。
- アメリカの経済学者ヴェブレン(Thorstein Veblen)は、学生への教育活動よりも学術研究が主要な業務としている。
- 英国の経済学者ロビンズ(Lionel Robbins)は、ロビンズ報告書の中で、大学には以下の4つの目的があり、能力と知識を必要とする者全てに提供されるべきであるとした。
 - 1) 技能教育
 - 2) 一般的な精神力の形成
 - 3) 教育とバランスの取れた研究活動
 - 4) 市民に共通の文化・水準の伝播
- このように、大学にはその時代や解釈により、様々な役割と使命があると考えられており、個々の大学によりそれを定義している。
- 3つの質問を元にディスカッションを行った。
 - 1) 日本と英国の「大学」に対する考え方はどのような違いがあるか。
 - 2) 英国の大学の国際化活動はそのときの政治的、経済的環境にどのように影響されているか。
 - 3) 英国の大学で公立か私立かによる違いはあるか。

IV. Group Discussion Session

Internationalization of higher education in the era of globalization: meanings and implications, Dr. Zhen Li, School of Education

国際化についての定義や、タイプ等の照会とともに、国際化に関する事項について、参加者と議論を行った。

- 「国際化」は、多様な国・文化や世界的な価値観を、高等教育の目的や機能の中に統合していく課程と定義できる。
- 高等教育の国際化は下記の3種類のタイプがある。
 - 輸入型:主に発展途上国及び旧植民地の国で、有能な教員を求めているがまだ近代的な高等教育システムが確立していない。頭脳流出や国のアイデンティティーが失われる等の課題がある。
 - 輸入・輸出型:英語以外の母語を持つ先進国及び一部の発展途上国で、教育のレベルを向上するために、英語教育等を取り入れ、同時に特徴的なプログラムを他に提供している。
 - 輸出型:英語を母語とする先進国で、他国の留学生を多く受け入れ、また国境を越えた教育を提供している。教育が商業化する弊害がある。
- 国際化について検討する際には、言語習得だけでなく、流動性、財源、国際の専門家、コミュニケーション、知識共有、プログラム及びカリキュラム、学問的な実践、相互関係(西洋化)等の様々な側面を考慮する必要がある。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取組み・方針等について

ノッティンガム大学をはじめ英国の大学は、アジアにキャンパスを開いたり、海外への遠隔教育を提供したりするなど、多様な国際戦略を用いている。また、高等教育の国際化に関する修士プログラムを開設するなど、国際化に向けた人材育成が活発になっている。今後、日本でも留学生の受け入れ及び海外派遣留学が強化されるにつれて、プログラム等が多様化・複雑化していくことが考えられるため、広い視野で多様な国際戦略を用い、その戦略を企画・運営できる人材を育成していくことが重要であると考えられる。

また、海外派遣を経験した学生に対し、その経験を糧に真のグローバル人材として成長し、さらには彼らの就業力を高めるため、派遣前・派遣中・派遣後という長期にわたるプログラムを提供し支援を行う取組みは、まだ日本では(英国でも)あまり例はないが、学生支援の充実化・高度化に伴い今後広がっていく可能性があると思われる。

ノッティンガム大学では、協定を結ぶ際には時間を掛け、双方の利点を考慮して実質的な交流を持てるものを選定して締結している。また、海外キャンパスや、交流に基づく海外での事業を展開しているが、多様な分野で多くの事業を実施しているのではなく、大学の特色や、英国政府の方針などを考慮して定めた大学の目標に沿った事業を展開していると感じた。大学が方向性を定めることで、職員の業務、目的も明確になり、結果的にぶれることなく、効率的に業務を行って来ている印象を受けた。

5. 報告者所感

これまでは、英語圏の大学について、留学生受け入れ及び支援が発展しており、システムとして確立されているが、留学生政策について、国際化の一環としてというよりもむしろ財政的な戦略の一部として行っている印象があった。また、英国人学生の海外派遣について積極的ではない印象があった。

今回の訪問で、ノッティンガム大学の国際化戦略や海外派遣目標等をお伺いして、英国の高等教育において、世界の中で活躍できる人材育成や、異文化理解という意味での国際化の重要性が高まってきていることが感じられた。

ノッティンガム大学に限ったことではないが、各大学は大学の特色を出すことを重視し、学生の教育や、就学環境を大切にしていると感じた。英国の大学の運営費交付金は、大学全体の収入の4割で、授業料収入は4割。対して日本の運営費交付金は4割で授業料収入は1割であるが、このことが、学生の教育、就学環境に対する日本と英国の考え方に影響を与えているのかも知れない。今回の視察では、各大学の研究の様子や、講義の様子は視察することが出来なかったが、そのような機会があれば、より大学の状況を知ることが出来たかも知れない。



(報告担当: 難波江 有三、古田 知美、河内 明子)

1. 大学の概略

イーストアングリア大学(UEA)は、1963年創立、ノーフォーク州ノリッジとロンドン(2010年開設)にキャンパスを置く。ノリッジのキャンパスは、パークランドや湖を含む362エーカーからなり、歴史に満ちたノリッジの町の中心部に近い位置にある。

人文科学(Arts and Humanities)、医学・保健学(Medicine and Health)、社会科学(Social Science)、理工学(Science)の4つの学部を持ち、特に、クリエイティブ・ライティング、国際開発学(International Development)、環境科学(Environmental Sciences)には定評がある。加えて、炭素社会における経営学(Strategic Carbon Management)やブランド・リーダーシップ学の修士課程等、斬新なプログラムも開発している。

UEAは、他にも、キャンパス内に世界でも名高いセインズベリー視覚芸術センターを有すること、そして毎年国際リテラシー祭を主催することでも知られる。

学生数は約15,000名で、そのうち留学生は3,000名近く在籍。うち日本からの学生は60名ほどである。教育研究の世界ランキングは上位1%(Time Higher World League Table 2012)に位置しており、他の数々のランキングで上位に位置している。また、学生の満足度も非常に高い大学である。

UEAの附属研究所であるセインズベリー日本芸術研究所は1999年に設立され、日本の芸術・文化の分野における研究拠点として世界最高水準の研究を推進していることで知られている。UEAのみならず、大英博物館、ロンドン大学東洋アフリカ学院(SOAS)とも共同の研究活動を行っている。なお、研究所内にあるリサ・セインズベリー図書館は、日本の芸術・文化に関する蔵書がヨーロッパにおいて屈指の質と量を誇ることで知られている。当研究所との強力な協力体制のもと、2011年に開設されたCentre for Japanese Studiesでは、日本語コースを新設したが、当初の予定の定員を3倍近く上回る18名の学生が、現在本コースで学んでいる。

UEAの質の高い教育をロンドン中心部で提供する目的で2010年に設置されたUEAロンドンは、就職の機会が豊富であるロンドン金融街に近いロケーションで、ビジネス・経済学関連の大学進学準備コースから経営学修士や国際外交のコースまでを開講している。



2. 訪問スケジュール

発表 1: イーストアングリア大学における事業計画について

UEA Internationalisation Strategy, Mark Barlow, Director, University Services

発表 2: 学生の就職支援について

Developing business links to enhance student employability, Janka Rodziewicz, Careers & Employability

発表 3: イーストアングリア大学ロンドンの開設

The University of East Anglia in London, Dr Richard Harvey, Dean

発表 4: 留学生受入れと派遣

An overview of Study Abroad, Mrs Karen Blackney Head of the International Office and Ms Alex Cole International Summer Schools Manager

3. 発表要旨

発表 1: イーストアングリア大学における事業計画について

UEA Internationalisation Strategy, Mark Barlow, Director, University Services

国際戦略に関係する次期5年間の事業計画は次のとおりである。

研究面に関して

- ・教育研究基金の獲得を有利にするため、インパクトのある「研究における世界の大学ランキング 100 位以内」を目指す。
- ・国際的な研究機関と関係を強化する。また、より効果的な成果が出るよう UEA が強い分野に近い機関との連携を重視する。

研究者の獲得に関して

- ・質の高い博士課程修了者を獲得するため、その支援体制を充実させる。

国際化の方針に関して

- ・質の高い学生獲得を推進、共同研究の支援、研究者へのサポート、卒業生とのネットワークの強化等を行う。
- ・UEA と同様の分野に強みを持つパートナーを獲得し、海外の協定機関との教育・研究の機会を増やす。
- ・海外にある研究施設において、教育・研究を行うことを検討する。
- ・学生の派遣・受入をより活発にする。(背景の一つとして、外国語および学費がネックとなり、英国人学生の派遣はあまり活発ではない現状がある。)
- ・東南アジア、中国、南アメリカをターゲットとし、2~3 つの海外オフィスを置く。(それら地域に関心のある教育を行うことを目指し、各地域の研究機関とネットワークを築くことを目的としている。また、その地域から UEA に来た留学生のキャリアサポートができる。)

国際戦略に関して

- ・隣接するノリッジ研究所と連携し、世界中から優秀な博士課程の学生、修了者を獲得する。
- ・UEA において評価の高いクリエイティブ・ライティング・コースをさらに推進する。
- ・国際的に知名度のあるロンドンにて国際事業を行う。

国際戦略の目的とターゲットに関して


- ・各種プログラムにより、英国人学生の学生交流を活発にする。
- ・質の高い留学生を多く獲得する。
- ・海外オフィス等を設け、外国における活動を実施する。
- ・学生の国際プログラムについて参加実績等を追跡するシステムを構築する。
- ・海外において教育を提供することを推進する。



発表 2: 学生の就職支援について

Developing business links to enhance student employability, Janka Rodziewicz, Careers & Employability

UEA の就職支援は、主に次の5つからなる。ノリッジ及びロンドンのキャンパス双方に置かれた就職担当部署のほか、卒業生のネットワークも活用し、留学生も含めた学生の就職を支援している。



インターンシップ

インターンシップ(12週間、大学院生を対象)、サマープログラム(6月、10月に集中的に実施学部生を対象)、スプリングボード・プログラム(学部生を対象に今年度から新たに実施)

メンタープログラム

卒業生がメンターとして学生のサポートを行うプログラムで6~9か月程度、1学生につき1人のメンターが相談に応じる。個人面談、Eメールによる相談を通じて、就職に関するアドバイスを行うことにより、学生に自信をつけさせることを主眼とする。

就業機会の提供

学生の身分に応じて、ワーク・シャドウイング等、各種の就業体験の提供を行う。

就職フェアやワークショップ等の各種イベントの実施

学生の起業支援

新たな試みとして、起業を希望する学生に対する支援として、起業に必要な技術を身につける研修の提供、共同スペースの提供等を行っている。卒業後5年までの学生までを対象としている。

発表 3: イーストアングリア大学ロンドンの開設

The University of East Anglia in London, Dr Richard Harvey, Dean

ロンドンには9万人の留学生が集まる場所であり、就職の機会が多く集中するところである。2010年、そのロンドンでUEAブランドの、ロンドンならではのプログラムを提供する目的で、UEAの経験のある経営チームによってUEAロンドンが開設された。また、UEAロンドンから程近い位置に学生寮も作られている。

現在、学部から大学院入学準備のための英語、ビジネスや経済学のファウンデーション・プログラム、及び経営学修士課程などが提供されている。

発表 4: 留学生受入れと派遣

An overview of Study Abroad, Mrs Karen Blackney Head of the International Office and Ms Alex Cole International Summer Schools Manager

留学生受入れ

・「INTO 大学パートナーシップ」は、2006年UEAと共に留学生受け入れを促進する大学付属の英語コース/進学準備コースを担うイギリス初の「INTO センター」を設置した。UEAを含むイギリスの大学や大学院に進学希望の留学生が語学や専門分野の基礎を学んでいる。


・2012年秋、アメリカ69大学、オーストラリア29大学、カナダ12大学、ブラジル10大学などから留学生を受入れており、今後は日本、ブラジルとの協定大学も増やす予定である。

・受け入れによっても、個人・機関レベルの国際化が推進され、大学院の注目度が上がり、授業料収入の増加も見込める。

インターナショナル・サマープログラム

・ブリッジのキャンパスで、7月に開かれ、40時間以上の授業時間で20クレジットの内容を含む。学部Level2の授業内容、ディベートや実践的なセミナー、研修旅行が組まれている。課外活動には、エクスカージョンや週末の夕刻に行うゲーム、名所訪問などが企画されている。

・UEAロンドンでも、寮に滞在型のサマープログラムが提供されている。一つは劇場(演劇)管理のモジュールを受講する2週間プログラムで、国会議事堂や金融街、テート・モダン美術館、自然史博物館などの見学が組まれている。ほかに



英国の映画、テレビやグローバル・メディアのモジュールと商法のモジュールを受講するプログラムを提供しており、それぞれに学術的な研修旅行が含まれている。

・2012年には、オーストラリアより6名、アメリカより15名(北アメリカからは14名)、ヨーロッパより6名、アジアより5名(韓国3名、日本2名)、アフリカより1名の参加を得た。

学生の海外派遣

2011-12年には、欧州内にはエラスムスを通して93名、欧州以外には120名が派遣された。今後学生派遣にも力を注ぎ、学生の、「企業から雇われ得る能力」を伸ばしていくことが望まれている。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取組み・方針等について

・UEAでは、留学生および社会人をターゲットとし、都心のロンドンに1,500人分の寮を持つUEAロンドンを設置しており、積極的な拡大戦略をとっている。日本においては、地方大学が首都圏にリスクの小さいサテライトキャンパスを置くことが多いので、UEAロンドンの今後の展開を注視したい。

・日本の大学においては、国際戦略を検討する際、大学全体の戦略とは別に検討される大学も多いかと思われるが、UEAでは大学全体の戦略、学生を呼び込むためのマーケティング戦略の一環として国際戦略をとらえている点が、日本の大学にとっても今後、参考になると考える。

・UEAは、海外の教育機関と学術的提携を行う場合に、UEAが強い分野に優れたパートナーを探し、研究や協力の機会を増やし、互恵的な提携を戦略的にやっているところは、今後日本の大学にも必要な視点であろうと思われる。

・UEAとUEAロンドンはINTOの実施大学として留学生のための大学、大学院入学準備コースを幅広く用意しており、語学力のみならず、基礎的なアカデミック・スキルの習得の後、各大学の進学先に合わせた教育を行っている点で、留学生にとっては、決まった期間内に効率よく準備ができるものと思われる。

5. 報告者所感

・日本においては、志望学生が減る傾向にある分野において新たな教育研究組織を作ることは難しいのですが、英国の多くの大学で人文系の分野が予算面から削減され、英語以外の言語を学ぶ学生も減少していると言われる中、敢えて日本語コースを新たに設置し、附属研究所(セインズベリー日本藝術研究所)の強みを活かすというイーストアングリア大学の試みは興味深かったです。

・日本の多くの大学では、各部署にてそれぞれ中期目標、中期計画を作成するため、各部署で方向性にズレを感じる場合があります。一方、イーストアングリア大学を通して感じる英国の事業計画は大学全体で計画させており、国際事業に関しては、留学生として受け入れた学生を博士号修得後にポスドクとして雇い入れる流れのような、一連のPlanが成り立っており、今後の目指す方向性が明瞭であると感じました。

・ロンドンから電車で1時間半ほどとそれほど遠くないノリッジにメイン・キャンパスを持ちながら、UEAロンドンを設置するといった発想は、日本の大学ではされにくいと思われます。しかし、UEA水準を保ちつつ、イギリスの首都ロンドンの留学生市場に着目し、細かく需要を読み、ノリッジにはないロンドンの地の利や長所を生かしたコース提供を提供しようとする積極的な姿勢は、評価に値すると思います。住居費の高いロンドンでも学生寮が整っている点、卒業後就職に向けての活動がしやすい点などは、留学生を含む学生にとって、非常に魅力的で、学生の満足度も高く、成功しているというのも納得できる気がします。



(報告担当:大野 智子、三好 智也、奥村 圭子)

第4回英国大学視察訪問 参加者リスト

参加者リスト(所属機関名アルファベット順、敬称略)			
1	難波江 有三	北海道大学	国際本部国際連携課 国際交流担当係長
2	島本 絵理	慶應義塾大学	湘南藤沢事務室学事担当事務員
3	伴 美喜子	高知工科大学	国際交流センター ディレクター
4	三好 智也	京都工芸繊維大学	国際企画課 国際交流係 係員
5	高原 芳枝	九州大学	国際交流推進室 准助教
6	富永 敬子	明治大学	国際連携部国際連携事務室 職員
7	古田 知美	名古屋大学	国際部国際企画課国際連携グループ掛長
8	河内 明子	立命館アジア太平洋大学	スチューデント・オフィス 課長
9	塩田 邦成	立命館大学	国際部事務部長
10	大野 智子	東京外国語大学	総務企画課 課長補佐
11	古川 佑子	東京理科大学	国際化推進センター長
12	畑 和秀	筑波大学	国際企画課 一般職員
13	奥村 圭子	山梨大学	山梨大学留学生センター副センター長

(所属機関・役職は2012年11月時点のものです。)